

ヴィクトリア朝中期における狂気・虐待・犯罪

——ディケンズの「花嫁の部屋の幽霊」をめぐる考察——

吉 田 郁 世

序

「花嫁の部屋の幽霊」(“The Ghost in the Bride’s Chamber”)は、チャールズ・ディケンズがウィルキー・コリンズと共に執筆した「二人の怠惰な奉公人の不精な旅」(‘The Lazy Tour of Two Idle Apprentices’・1857年『ハウス・ホール・ワーズ』初出)の第4章に挿入された物語である。フレーム・ワークとなっている話には、フランシス・グッドチャイルドとトマス・アイドルという二人の愉快な旅人が繰り広げる珍道中が描写されているのだが、それとは対照的に、この挿入された物語では遺産をめぐる殺人事件が扱われており、ゴシック風のグロテスクで不気味な雰囲気漂う世界が展開されている。

ハリー・ストーンによれば、ディケンズは、ある無慈悲な夫が若い花嫁を暗い部屋に監禁した上で毒殺し、その後捕らえられてランカスター城の傍で処刑されたという伝承をもとに、この物語を執筆したということである¹⁾。ディケンズの物語は、花嫁の殺害者である男が、処刑されてから百年の月日が流れた今も幽霊となって現世に姿を現し、グッドチャイルド氏とアイドル氏の前で自分の人生について語り始めるという内容になっており、精神病院や犯罪者の異常心理など、ディケンズが当時大いに関心を示していた事象が盛り込まれている。また、ストーンは、「花嫁の部屋の幽霊」以降、ディケンズが執筆した小説に登場する中心人物は、「激しい情熱」に打ち負かされていること、そしてその情熱が抑制不可能で、「必然的に偏執狂や衝動強迫へと拡大する」ことを指摘している²⁾。ヴィクトリア朝中期の狂気をめぐる言説では、狂気は激しい感情が原因となって

生じるものであると考えられていた。したがって、ディケンズの作風の転機となった作品であり、狂気と激しい感情を詳しく描写している「花嫁の部屋の幽霊」を分析することには意義があるといえる。

本稿では、ヴィクトリア朝の心理学・精神医学と文学作品の関係について触れた後、「花嫁の部屋の幽霊」とセンセーション・ノヴェルとの関連性に注目しながら、当時の理想の女性像とそのネガティブな側面、殺人犯の異常心理の描写について探究し、最後に、社会改革者としてのディケンズと精神病院の関わりや、ヴィクトリア朝中期に展開された狂気の諸言説を詳しく取り上げることで、ディケンズの作品に見られる特徴について考察してみたい。

1 諸科学の発達と文学作品における心理描写

19世紀のイギリスでは、心理学や精神医学などの諸科学が文化に影響を及ぼすようになったが、その中でも特に注目されていたのが狂気の言説だった。当時、狂気は「高度の文明化および産業化から生じる病気」であると考えられており、「最も豊かで最も進歩した国」であるイギリスでは、狂気の発生率が「必然的に最も高くなるという点で、内外ともに人々の意見が一致していた³⁾」。19世紀に発達した諸科学の理論は、当時の小説や詩にインスピレーションを与えたため、文学作品における人物の心理描写は、人間の精神状態や狂気をめぐる言説とともに大きな変化を見せた。例えば、1830年代に催眠術が大流行した際に、ディケンズやコリンズは、催眠術が人間の心に及ぼす影響を詳しく表わした作品を発表している⁴⁾。ヴィクトリア朝以前の作家であっても、例えばジェイン・オースティンは優れた性格描写を行っていたが、それは心理学的な学説に基づくものではなく、彼女の注意深い人間観察によるものだった。心理学という学問のジャンルが哲学や美学、社会学から独立を果たしたのは19世紀半ばのことであり⁵⁾、それに伴い、ヴィクトリア朝の作家はオースティンとは異なる手法で人物の身体や精神を描写していくことになる。

ディケンズをはじめとするヴィクトリア朝の作家は、科学者の友人や知人を持ち、その交流から得た専門的な知識を活用した作品を執筆している。例えば、

ディケンズの友人には、精神病院の発展に大きく貢献したジョン・コノリーや、催眠術の提唱者であるジョン・エリオットソンなどの学者がいる。また、ディケンズが活躍していた時代には、文明人としてのモラルが強調されており、精神科医たちが理性や勤勉性の象徴としてのモラルに関する学説を次々と打ち立てていたために、社会改革に積極的に携わっていたディケンズも、小説の中でモラルの重要性を訴えかけている。その一方で、ディケンズは自己抑制できない人間の感情に対して関心を抱き、犯罪者や囚人の描写を繰り返している。ディケンズの作品に登場する悪人は、彼が意識していたモラルの問題や異常心理の描写と深い関わりがあるため、その表現は特徴的なものとなっている。また、ディケンズは18世紀に流行したゴシック小説の末裔であるゴースト・ストーリーを好んで執筆している。フィリップ・コリンズが言うように、ディケンズが殺人事件や幽霊に関する話題を好んでいたのは、ディケンズが犯罪者の心理や幽霊に遭遇した時の人間の異様な心理状態に注目し、その描写にこだわっていたためである⁶⁾。このように、ディケンズは、ヴィクトリア朝の精神科医と同じように人間の精神状態を観察し、人間の理性やモラルを讃える一方で、犯罪と恐怖、異常心理についても積極的に語っていた作家の一人なのである。

さらにディケンズは、自身が編集する定期刊行物を通じて諸科学の学説を普及させるとともに、新たな小説のジャンルとして、ウィルキー・コリンズやチャールズ・リードなどが執筆したゴシック小説の流れを汲む煽情的な内容の作品であるセンセーション・ノヴェルを取り上げている。性や犯罪に関するラディカルな表現が特徴的であるこのジャンルの作品は、心理学および精神医学に基づく描写が目立っている。ヴィクトリア朝の定期刊行物には、精神の働きやその定義・分類、狂気の治療に関する膨大な量の学説が頻繁に掲載されており、その時代の知的文化を形成する上で重要な役割を担っていた⁷⁾。したがって、当時多くの定期刊行物に連載されていたセンセーション・ノヴェルは、同じく掲載されていた学説を反映したものであると捉えられる。ディケンズが編集を担当していた『ハウスホールド・ワーズ』や『オール・ザ・イヤーズ・ラウンド』は、そうした定期刊行物の典型例であるため、ディケンズは心理学および精神医学の学説を広く民衆

に広め、センセーション・ノヴェルの先駆者となり、さらに後のセンセーション・ノヴェルの流行に大きな貢献を果たした作家の一人であるといえる。

2 ヴィクトリア朝の理想の女性像とそのネガティブな側面

ディケンズの描くヒロインは、結婚に関するモラルを遵守する女性であるために、サラ・エリスやコヴェントリー・パトモアが推奨していた「家庭の天使」と同じく、当時の中産階級の女性にとって理想的な存在であった。マイケル・スレイターは、ディケンズの表現する女性が「生来の聖職者といったタイプの女性であり、人間というよりも神に近く、とりわけ死に直面した際、男性にとって精神的な強さと励ましを与えるような存在となる」と述べている⁸⁾。要するに、ディケンズ作品におけるヒロインの役割は、か弱い存在でありながら、高邁な精神によって男性、ひいては社会を善に導くことなのである。

これに反して、「花嫁の部屋の幽霊」では、敬虔で天使のような女性が登場することはない。花嫁の母親は気まぐれで打算的な女性であり、自分の愛する男性ではなく、裕福ではあるが無能な男性と結婚することを選び、夫の死後も昔の恋人を利用し続け、亡くなる際には彼に何一つ残さない。このような母親に対して、花嫁は「色白で、亜麻色の髪をした、大きい瞳の少女」(387)であり、この美しい容貌は、ディケンズの小説に登場するヒロインたちに共通している。しかし、花嫁は「無力さ」(387)ゆえに亡くなった父親に似て、ディケンズが通常描くヒロインのように男性や社会に対して特別な役割を担うことができず、母親に恨みを抱く男に残酷に扱われた挙げ句、殺害されることになる。

花嫁の母親が亡くなった時、まだ幼かった花嫁の後見人に任命された元恋人は、「金銭による賠償」(387)を得るための計画、すなわち、一人娘を思いのままに養育し、自分の妻とした後、その遺産を奪い取り殺害する計画を立てる。手始めに彼は、少女の家庭教師として無節操で用心深い女性を雇い、少女が彼に恐怖の念を抱くように教育するよう命じる。こうして少女は、将来彼の妻となること、そして彼やこの「人里離れた、暗く、重苦しく、古い家」(388)から逃れることは不可能であることなどを教え込まれる。両親を亡くした無力な少女に対して権

力を誇示することはそう難しくないと感じた後見人は、彼女の性格形成がいかに思い通りになるものであるかを、次のように述べている。

この哀れな馬鹿者は、後見人と家庭教師の手中にある白く柔らかな蠟も同然で、彼らと与えた痕跡を留めていた。その痕跡は時とともに硬くなり、彼女の一部となり、ついに彼女の生命を奪わない限り、分離させることは不可能となった (388)。

こうして少女は常に孤独であり、暗闇の中で恐怖に怯える生活を送ることになったが、その結果、少女の性格は恐れと悲しみによって形成され、喜びも怒りも表現できないようになる。アイデンティティを完全に奪われ、いかなる希望も抱くことができない状態にあるこのヒロインは、ディケンズの作品の中で最も抑圧されている女性であるといえる。少年時代にトラウマとなるような経験をしたディケンズは、境遇の犠牲となっている子どもたちに対して深い同情を示しているのが通常だが、この作品のヒロインに対しては、復讐心を抱く後見人と一体になって冷淡な態度をとっている。

少女に転機が訪れることのないまま、後見人は計画を忠実に実行していく。成長して21歳になった時、ヒロインは後見人の花嫁となり、彼の陰気な屋敷に連れて行かれる。妻が亡くなれば遺産は全て彼のものになるという内容の書類に署名させた夫は、昼も夜も「死ね！」(389)と妻の耳元に囁き続ける。長年にわたる監禁生活に加えて、夫の虐待による恐怖を体験した花嫁は、心身ともに衰弱していき、ついにある晩、夫から逃げ出して突然大きな叫び声をあげた後、死を迎えることになる。

青白い光の中でさらに青白い顔になり、鉛色をした夜明けよりもずっと青ざめた彼女が、床に沿って身を引かずるようにしてやって来るのを彼は見た。(中略)彼女の大きな目は驚きと恐れで見開かれていたが、その驚きと恐れは非難に変わり、その非難は空虚なものへと変わった。彼の目的は達成されたのだった (389)。

彼女の夫は、まるで呻き苦しむ怪物を見るかのようにその死を眺め、その結果に満足し、罪の意識を全く感じることはない。デボラ・トマスは、この物語にはフランスの童話「青髭」に見られるような残忍性が存在していると指摘しているが⁹⁾、この物語のヒロインには外部から救済してくれる者が現れず、最終的に悪人に屈してしまうため、善人の勝利で幕を閉じるというのが定番であるおとぎ話とは異なり、読者の心に不気味でグロテスクな印象を与えるものとなっている。

この作品におけるヒロインの描写は、「弱きうつわ」としてのヴィクトリア朝の女性をもつ暗い側面を暗示している。ディケンズはヒロインの弱さのみを強調しており、夫に慈悲を請うばかりで、自分自身の運命を変えることができない女性として表現している。当時理想とされていた繊細さや従順さという性質を備えているがゆえに、ヒロインは虐待・殺害されてしまうのである。ヒロインの「無力さ」は、後見人が用意した劣悪な養育環境に由来するものであることに、疑いの余地はない。幼少時より「外」の世界から完全に隔離され、家の中に一生閉じ込められており、十分な性格形成の場を与えられなかったために、自己を意識する機会すら奪われ、男性の横暴なふるまいに耐えることしかできず、ついには恐怖のうちに息絶えるというこのヒロインから、女性の弱さを軽蔑しながらも、女性を抑圧し搾取することで生きているヴィクトリア朝の男性像や、ヴィクトリア朝社会における男女の関係が明らかになる。

ヒロインが後見人である夫に絶えず恐怖の念を抱くように仕組まれ、最終的に殺害されるという設定は、煽情的であると同時に、女性の精神的な弱さが恐怖心や狂気と結びつけられる傾向にあった当時の状況を物語るものでもある。ヴィクトリア朝中期の心理学では、特に女性と狂気を関連づけることが流行しており、それと平行して、文学の世界でも女性と狂気をテーマにした作品が、センセーション・ノヴェルとして登場したのである。

ディケンズの物語における花嫁と夫の関係は、ウィルキー・コリンズが執筆した最も有名なセンセーション・ノヴェルである『白衣の女』(1860)に登場するローラ・フェアリーとパーシヴァル・グライドの関係に類似している。遺産相続人であるローラは、その財産を狙うパーシヴァルと結婚するが、財産関係の書類

にサインすることを拒んだ彼女は、彼の策略で精神病院に監禁されることになる。この小説で特徴的なのは、ローラがはかなげで美しいヒロインであり、ハートライトというヒーローによる救出を待つことしかできないことである。ディケンズの物語のように、裕福な女性は悪人の標的として危険にさらされるのである。さらにこの小説では、狂気が女性と密接なつながりを持ち、精神病院が女性を狂気と結びつけて監禁する役割を果たしている。よって、女性の財産と狂気は、ミステリー小説にとってきわめて重要な題材だったのである。「花嫁の部屋の幽霊」において、既にこの女性の財産と狂気というテーマを扱っていたディケンズは、センセーション・ノヴェルの先駆者であったと捉えられる。

しかしながら、ディケンズの物語とコリンズの小説の違いにも注目しなければならない。『白衣の女』には、ローラとは全く対照的な役割を演じるマリアンという女性が登場するのである。頭脳の点では男性に引けをとらない活発な女性であるマリアンは、ハートライトを手助けしてローラを救出する。コリンズの小説が、知性と行動力の面で男性と対等な女性を表現しているのに対して、ディケンズの物語は、ステレオタイプ化された女性の性質を示しており、その点では前世紀のゴシック小説により近いといえる。

後にディケンズは、センセーション・ノヴェルの典型である『大いなる遺産』(1860-61)を執筆しているが、この小説は「花嫁の部屋の幽霊」と多くの共通点をもっている。このことは、ディケンズが女性と狂気、そして幼少期の教育と性格形成の関係について興味を持ち続けていたことを示している。『大いなる遺産』は、脱走した囚人であるマグウィッチという人物を登場させ、財産と犯罪の問題を中心に据えている。ミス・ハヴィッシュは、恋人に裏切られて発狂したという点で、オフィーリアの流れを汲んでいるが、オフィーリアのような美貌や純粋さを見る影もなく、ピップの目には、陰気な屋敷に住む花嫁衣裳を着た不気味な老女として映る。この小説のヒロインであるエステラは孤児であり、後見人であるミス・ハヴィッシュに育てられたが、ミス・ハヴィッシュの教育が男性に対する復讐と深い関わりをもっていたために、エステラは感情をもたない女性に成長し、結果的に夫に虐待されることになる。この点で、エステラは、「花嫁の部屋の幽

「霊」のヒロインと共通している。エステラは気まぐれであり、ピップの心を翻弄していたという点では花嫁の母親に近い。しかし、これはミス・ハヴィシヤムの偏った教育が生み出した性質であって、エステラの意志によるものではない。エステラは、自身の態度に困惑した様子を見せることがあり、花嫁の母親のように一貫して気まぐれな女性として描かれてはいないのである。虐待に怯える描写のみがなされていた花嫁と比べて、ディケンズは、エステラの心を多面的に表現することに成功しているといえるだろう。また、この小説で表現されているピップとエステラの関係は、「花嫁の部屋の幽霊」における男女関係よりもはるかに緊迫感をもっている。さらにディケンズは、狂気や異常心理、犯罪をテーマにした作品をこれ以降も発表し続けていることを考えると、「花嫁の部屋の幽霊」は、ディケンズの作風の転換期に位置する作品であるとみなすことができる。

3 富への執着と追われる恐怖という異常心理の描写

フィリップ・コリンズが指摘しているように、ディケンズはセンセーション・ノヴェルに登場する泥棒や詐欺師、殺人犯などの犯罪者に関心を示している。例えば、『オリバー・ツイスト』(1837-39)のビル・サイクスや『エドウィン・ドルードの謎』(1860)のジョン・ジャスパーのような悪人は、しばしば主人公よりも印象的であるといっても過言ではない¹⁰⁾。この傾向は短編において一層顕著で、「花嫁の部屋の幽霊」においても、花嫁の殺害者は他のどの登場人物よりも異常さが目立つ。この殺人犯は、登場の場面から非常に不気味な人物として描写されている。

冷たい感じがして、活気がなく、頑健で、ぴくりとも動かない老人。控えめに話をする、死人のように青ざめた老人。まるでまぶたが額に釘で打ちつけられているかのよう、まばたきすることができない老人。火を噴いているような二つの目が、白髪頭の間から、まるで後頭骨にねじ釘で穴をあけられて、リベットかボルトで留められているかのように動かない老人(387)。

炎のように光る目を動かすことができないという描写は、殺人犯の富に対する執着心と関係がある。かつて貧しかったために恋人に裏切られた彼は、富を得ること以外に目が向かなくなり、不実な元恋人の娘を脅かし、その財産を手に入れることに全ての力と時間を投資する。この傾向は、婚約者に金銭絡みで騙され、孤立した屋敷で時間の感覚を失い、世の中の男性に復讐するためにエステラを育て上げたミス・ハヴィッシュムにも当てはまる。花嫁がエステラの原型であるとするならば、殺人犯はミス・ハヴィッシュムの原型なのであり、両者は心に傷を負い、正常な状態やモラルから逸脱しているといえる。殺人犯が少女の嘆き苦しむ様を見て喜ぶ一方、ミス・ハヴィッシュムはエステラによってピップが欲求不満になっていく姿を見て楽しんでいるというように、彼らは怒りや悪意の中にしか喜びを見出せなくなっている。

殺人犯の富に対する執着とともに示されているのは、女性嫌悪と権力への執着である。貧しさゆえに女性に拒絶されたという経験は、彼の「無力さ」を明らかにするものである。その結果として、彼の心は女性に対する恐怖と怒りで満ち溢れ、少女を虐待し続けることで、自身の権力を回復しようとする。少女を監禁して自由を奪うという行為は、彼の権力を脅かす女性を身体的に拘束し、その精神を管理することで、徹底的に弱体化することを意味している。「花嫁の部屋の幽霊」に登場する殺人犯の妄想はひどくなる一方で、結婚後、彼は妻を殺害することが使命であるかのように感じている。

このさびれた屋敷に閉じ込められ、あらゆる種類の人間から離れて、一刻の猶予も与えられず闘いに従事してきたが、どうやら彼か彼女のどちらかが死すべき運命にあるということになった。それを心得ているがゆえに、彼は彼女の弱さに対して大きな力を及ぼしてきたのである (389)。

殺人犯にとっての「闘い」とは、権力をめぐる男女の緊迫した関係を表わしているのだろう。彼は、死に逝く妻を眺めている際、その髪に朝の光が差し込み、ダイヤモンド、エメラルド、ルビーといった宝石が光り輝いているのを見るとい

う幻覚を体験し、狂喜する。権力争いに終止符を打ったことに満足している殺人犯は、妻を宝石と同じように貨幣と交換可能な商品とみなすことで、ついに富を手に入れたことから喜びを得る。

妻を殺害した後、彼はその財産を相続し、旅行に出ようとするが、陰気な屋敷さえも金銭的な価値があることを思い、そこから離れられない。ディケンズは、ヴィクトリア朝の物質主義や拝金主義から生じる歪んだ人間の心をしばしば描写しているが、この物語の富に取り憑かれた男の心に対するディケンズの洞察力は、非常に優れたものである。富裕になろうとする執着心が仇となって、家の外へ出られなくなったこの男は、当時の女性と同じく家に拘束されることになる。さらに、弱者としての女性=妻を抹殺してしまったために、彼はもはや自分の権威を確認することができず、不安に駆られることになる。

屋敷から離れられなくなった殺人犯は、徐々に追われる側へと転落していく。それは、全てを目撃していた若者との出会いから始まる。若者は花嫁と同じくらいの年齢で、花嫁の命を救えなかったことを後悔して、激しく泣きながら彼を責め立てる。妻の最期の姿に似た容貌をもつ若者によって脅されたために、殺人犯は、やむを得ず彼を殺害する。花嫁の死を防ぐことができず、登場した途端、殺人犯にいともしないで殺されてしまう若者は、花嫁と同じく「無力な」存在であり、この物語で何の役割も果たしていないような印象を受ける。しかし、若者を殺害したことで、殺人犯の不安と恐怖は間違いなく増大している。

さらに、若者の執念が奇跡を呼び、真相が究明されることになる。殺人犯は、若者が花嫁の部屋をのぞいていた木の根元にその遺体を埋めたが、その木の太枝が若者の形に変化していることに気付き、常に庭に注意を払わなければならない。彼の必死の努力とは裏腹に、奇妙な形をした木のことが世間で話題になり、ついには若者の遺体が発見される。ついで彼が妻を殺害したことも明らかになり、殺人犯は死刑宣告を受けることになる。刑が執行された後、殺人犯は成仏できずに幽霊となって陰気な屋敷に戻ることにになり、彼は、耳元で「生きろ！」(392)と囁き続ける花嫁の幽霊と、木の上から家の中をのぞき続ける若者の幽霊に絶えず悩まされる。

殺人犯のみならず、花嫁と若者も成仏できないという結末は、ハッピー・エンドが多いディケンズの作品の中では珍しいものであるが、ディケンズはこの不気味な物語を通じて、恐怖と深く関係している心理状態を表現することに専念している。他の作品においても、ディケンズは殺人を犯したという秘密から生じる恐れ感情を詳しく描写しており、例えば『荒涼館』（1853）では、犯罪のセンセーショナルな側面を強調するために、デッドロック夫人の恐怖と絶望を1章にわたって取り上げている（第55章）。長編小説と比較すると、心理的に異常な登場人物とその恐怖心に焦点を当てる短編小説において、ディケンズがより緻密な描写を行っていることがわかる。ディケンズが編集していた雑誌『マスター・ハンフリーズ・クロック』に掲載された「チャールズ二世の時代に獄中で発見された告白書」（‘A Confession Found in a Prison in the Time of Charles the Second’・1840）には、絶えず劣等感に苛まれ、殺人と死体遺棄を犯した主人公が、罪の露呈を異常なまでに恐れる様子が描かれており、この物語を読んだエドガー・アラン・ポーは、恐怖の描写が特に優れていると絶賛している¹¹⁾。この物語で用いられているドラマティック・モノロークの手法は、ポーの有名な短編小説「黒猫」（1843）で使われているスタイルと類似しており、異常心理の分析に重きが置かれているといえる。

ヘザー・バイクは、ディケンズがゴシック小説に通じていただけではなく、狂気を効果的に取り入れている17世紀から18世紀にかけての劇作家にも明るかったと指摘している。バイクによると、これらの芸術に影響されたディケンズは、狂気を「道徳的怠慢の結果」として描写していた¹²⁾。「道徳的怠慢の結果」として悪事を捉える見方は、悪事は理性や意志の弱い者が犯すものであり、道徳心を保てる者とは無関係であるという、聖書に基づく教訓的な見解である。しかし、狂気の描写を通じて読者に道徳的な教訓を与えているのではない「花嫁の部屋の幽霊」は、道徳的価値を前面に押し出した他の作品とは異なる。ディケンズは、デボラ・トマスが言うように、この物語を教訓的なものにするのではなく、「異常な心理状態」や「通常は秘められている気持ち」を追求することに努めた¹³⁾。その結果として、自己中心的な男が罪を犯し、その後の運命が崩壊していく様子を

物語の中心に据え、殺人犯の心理状態をリアルに表現したのである。

「花嫁の部屋の幽霊」とゴシック小説、17、18世紀の演劇との違いは、狂気の扱いが変化したことに関係があるのではないだろうか。ミシェル・フーコーが指摘しているように、18世紀末を境にして、狂気と理性の分離の仕方が変化し、狂気は非理性と同義ではなくなっている¹⁴⁾。ディケンズの作品は、非理性を代表する殺人犯を罰して、理性の勝利を讃えているのではなく、狂気が全ての人間の心の内に潜むものであることを示している。また、ファンタジーであることを示すために外国を舞台にしていることが多いゴシック小説とは異なり、ディケンズは、イギリス国内を舞台に設定することで、狂気がいかに身近なものであるかを物語っている。さらに言えば、この物語に理性的で他者を善に導くような人物が登場しないのは、狂気の人間の行動を通して、読者が正気や理性とは何かを発見するためである。なぜならば、狂気と理性の分離が不可能になったということは、理性とは何かを語るために狂気が存在が不可欠になったためである。このことは、文学の世界と精神医学の世界に共通することである。

4 狂気をめぐる言説の推移とディケンズが表現する狂気

既に見てきたように、「花嫁の部屋の幽霊」は心理学とのつながりが強い作品であるが、この理由の一つとして、ディケンズが狂気に関する言説が流行した時期の作家であることが挙げられる。ヘザー・パイクは、ディケンズが狂気の表現という「強い想像力に富む伝統」を受け継いでおり、長編小説と短編小説の両方において、「狂気と環境」や「狂気と道徳」といったようなテーマを探究していたことを指摘している¹⁵⁾。これに加えて、ディケンズは犯罪や精神障害に関する法律の改善に関わり、精神医学や病理学に関するさまざまな記事を彼が編集する定期行物で取り上げていた。ジェニー・テイラーは、「精神の働きに関するさまざまな理論、そしてその定義、分類、狂気の治療方法などをもとに展開された議論は、ヴィクトリア朝の新聞や雑誌の重要な特集であり、同時代の知的文化に不可欠な要素であった」と述べている¹⁶⁾。その典型例として、中産階級の人々の知性の向上を目標としていた『ハウスホールド・ワーズ』は、狂気や精神障害に

関する記事を頻繁に特集していた。ディケンズ自身も、積極的に精神病院を訪れて、その現状を『ハウスホールド・ワーズ』で詳しく報告している。1851年のボクシング・デーには、ディケンズはロンドンにあるセント・ルックス・ホスピタルを訪問しており、そこで催されていた精神病患者による「不思議なダンス」について記事を書いている¹⁷⁾。

「花嫁の部屋の幽霊」のフレーム・ストーリーである「二人の怠惰な奉公人の不精な旅」において、グッドチャイルド氏は、ディケンズと同じように狂気に対して興味を示している。足を痛めたアイドル氏がランカスター・インで休養している間、好奇心旺盛なグッドチャイルド氏は宿の周りを散策し、精神病院を発見する。そして、ディケンズが『ハウスホールド・ワーズ』の記事を書いたように、グッドチャイルド氏もその精神病院の詳細をアイドル氏に語って聞かせる(396-97)。さらに彼は、他の仲間には加わず、親指と人差し指で莫塵の繊維を弄んでいる悲しげな表情をした患者に注目している。グッドチャイルド氏は、この患者が理解することを許された世界は莫塵の網目のみであるように感じ、全ての人間もまた「手探りの状態で」莫塵の繊維を凝視しているにすぎないため、この患者と大差ないだろうと憂鬱に浸っている(397)。現実世界から隔離され、自由に生きることができない精神病院の患者に同情しているグッドチャイルド氏は、狂気に関心を持ち、たびたび精神病院を訪問してその状況を報告するとともに、当時の精神病院のシステムを社会問題の一つとして深刻に受け止めていたディケンズの姿と重なる。

ディケンズはまた、精神病院における体験を利用して、読者に精神病院の実情を間接的に示し、狂気とは何かを語るために「花嫁の部屋の幽霊」を執筆しているといえる。グッドチャイルド氏が訪問した精神病院は、その後の物語の中に登場する男と花嫁が住んでいる陰気な屋敷と奇妙に重なり合う。精神病院と陰気な屋敷の両方で、ディケンズは社会と切り離された狂気の人々を登場させている。二つの場所の唯一の違いは、前者に属している人々が病気であると診断されているのに対して、後者に属している人々はそうでないことである。この物語は、精神を脅かすものとしての監禁と監視を繰り返して描写している。狂気であると診断

された患者のように、少女は幼少時から普通の生活を送る権利を剥奪されて、陰気な屋敷から出る機会を全く与えられず、精神を管理されるとともに行動を監視される。そして、殺人を犯した男が処刑されると、今度は花嫁と若者が、まるで精神病患者の行いを監視するかのように、執拗に男の行動を監視し続け、彼は二人の視線に苦しめられるのである。

また、殺人犯の罪を明るみに出したのが科学者であることにも、注目しなければならない。大枝が若者の姿形をしているように見えた奇妙な木は、科学者たちによって詳しく調査される。「しかし、その木を調査するために、ある科学者たちが遠方からやって来たので、彼(=殺人犯)は、運悪く彼らを(庭に)入れてしまった——あの畜生どもを入れてしまったのだ！」(391)と、殺人犯が科学者たちと関わってしまったことを非常に悔やんでいるように、彼らの調査に付随して若者の遺体が発見されたことで、殺人犯は罪を認めざるを得なくなるのである。この物語の科学者たちは、無秩序で混乱した世界において現実的かつ理性的に行動し、犯罪の証拠を発見するという重要な役割を担っている。そして、犯罪を明らかにすることは、殺人犯の狂気を発見することにつながっているといえる。科学者たちは、この作品における中心人物ではないが、犯罪と狂気を関連づけようとする当時の科学の傾向を示している。

それでは、当時の精神医学の言説において、狂気はどのように表現されていたのだろうか。「二人の怠惰な奉公人の不精な旅」を連載した年の11月、ディケンズは、ヴィクトリア朝の精神科医ジョン・コノリーの偉大なる業績を讃えた記事を『ハウスホールド・ワーズ』に掲載している¹⁸⁾。コノリー博士は、主著『精神病患者のための病院の建設と運営』(1847)や『機械による拘束に頼らない精神病の治療』(1856)において、虐待・暴力・不衛生のために、残忍で非人間的になっている「狂気の家(マッドハウス)」に、精神病患者を監禁すべきではないという意見を民衆に訴えた医師である。博士は、狂気の間人は道徳観念が正常に働いていないに過ぎないと信じており、医者が道徳的に適切な方向へと導くことができれば患者は正気に戻れると考えていたため、機械的な拘束の代わりに、患者を出来る限り普通の間人として扱うことを提唱している。さらにコノリー博士

は、狂気が情念や理性と深い関わりをもっており、狂気であるか否かは、道徳的な性質によって判断されるものとした上で、次のように説明している。

理性が崩壊するのは、比較という精神の動きが妨げられることで情念が精神機能に大きな損傷を与える時のみに起こり、その後、人間は発狂するのである。発狂した人間は、この状態が続く間は狂っているのであるが、その期間の長さに関わらず、恐怖の対象に夢中になる。この興奮状態による誤った判断を正すことができれば、発狂した人間は正気に戻れるのであり、正すことができなければ狂気のままである¹⁹⁾。

コノリー博士は、精神病患者は正気を取り戻すために正常な生活を送るべきだと結論づけている。この考えは、狂気の治療に携わっている人のみならず、「自助」や「自己抑制」を重視していたヴィクトリア朝の大衆に大きな衝撃を与えるものだった。イングランド国教会の聖職者であったジョン・バーロウは、コノリー博士の助力を得て、道徳心を保つことや自己抑制の美德を、次のように奨励している²⁰⁾。

正気であるか否かは、脳の病気であるか否かによって判断されるにも関わらず、その人がどのような人間であるかに因るところが大きい。知力に適切な指示を与えている人間は、冷静に判断する過程を習慣化することによって、早い時期から身体機能を統制することができ、分別が気まぐれを起こしている最中であっても正気を保つことができる。これに対して、動物的性質を抑えるのではなく、その言いなりになっているような人間は、不健全な状態によって分別が支障を来たしている時であっても、動物的性質の命令に疑うことなく耳を貸すのであり、そういう人間は正気ではない²¹⁾。

バーロウにとって、正気と狂気の唯一の違いは、欲望に打ち勝てるだけの自己抑制の能力を備えているか否かであり、弱さを克服することが狂気防止の鍵となると考えている点で、コノリー博士の主張と同じである。

コノリー博士の改革は、広く世間に普及したものの、彼が考えたようにうまく

機能するものではなかった。エレイン・ショウォルターは、コノリー博士の善意が「統治、指導、援助」といったような「家父長的権力の強い信念」に根ざしたものであり、それゆえに、博士は狂気とその患者に執着しすぎて、徐々に自分自身を苦しめるようになったと述べている²²⁾。道徳心があることこそが正常であると考えるコノリー博士の方法は、精神病患者を道徳的に管理し、最終的には狂気を治療することを目標としていた。狂気を治療可能な病気であるとするコノリー博士の見方には、ヴィクトリア朝中期におけるイギリスの進歩に関する確信が反映されており、非常に楽天的であるといえる²³⁾。

ミシェル・フーコーは、18世紀末からパリで精神病院の改革を行っていたフィリップ・ピネルを例にあげ、「狂人保護院は、狂人がつながれている鎖の非人間性から狂人を保護したが、他方、人間とその真理を狂人と鎖でつないだのだ」と述べている²⁴⁾。フーコーの指摘通り、19世紀は人間の真実を語るために狂気が存在が不可欠となった時代であり、狂気は理性と不可分なものとなる。したがって、コノリー博士の主張に見られたような狂気の治療が可能であるという考えは、正気と狂気の境界を不確かにした。これに続いて、知性や理性の障害とは関係性をもたないために判断が困難となる「部分的な狂気」に関する理論が話題を呼ぶことになる。精神科医であり民俗学者でもあったジェイムズ・コウルズ・プリチャードは、出版後20年の間、狂気の研究書のスタンダードとなった『狂気および精神に影響を及ぼすその他の病気に関する専門書』(1835)の中で、「モラル・インサニエティー 悖徳症」の概念を詳しく説明している。

「悖徳症」—自然な感情、愛情、好み、気質、習癖、道徳的性質、そして自然に起こる衝動等が病的に逸脱することから起こる狂気であり、知性または知的・理性的機能には目立った損傷が見られず、精神異常による幻覚あるいは妄想も特に見られない²⁵⁾。

プリチャードは、「悖徳症」の症状が単なる気質なのか病気なのか境界を定めることが不可能なものであり、「悖徳症」にかかっている人間は、社会で普通に生活していることが多いと述べている。また、「悖徳症」は、過度に興奮した感

情が原因で道徳心に異常が見られる病気であり、精神器官には影響がないとされている。

さらに、プリチャードは、「悖徳症」とならんで狂気であるか否かの判断が難しい「部分的な狂気」として、「^{モノマニア}偏執狂」を取り上げている。「偏執狂」は、フランスの精神科医であり、プリチャードの研究に影響を与えたジャン・エティエンヌ・エスキロールが、激しい感情と関係がある「分別の病気」・「文明の病気」であると定義した狂気の一つである²⁶⁾。プリチャードの前掲書で、「偏執狂」は以下のように説明されている。

「偏執狂、あるいは部分的な狂気」—ある対象に触れること、そしてある考えに関わることで、理解力が部分的に異常を来たす、または、理解力がある特定の幻想の影響下にある狂気。他の対象に関して知的能力を働かせる際には、ほとんど異常が見られない²⁷⁾。

「偏執狂」は、ある特定の思考の流れに異常が見られることを除けば、他の点では全く理性的であるという狂気であり、この狂気の言説が広く知られるようになると、今度は狂気の人間に犯罪責任を負わせることができるか否かといった議論がなされるようになる。こうして、狂気をめぐる議論は増加し続けたが、その議論によって正気と狂気の境界が明確に定義されることはなく、理性を発見するためには狂気存在を提示することが必須である状態に変化は見られなかった。結局のところ、コノリー博士にせよプリチャードにせよ、理性を保つことの重要性を訴えるために、狂気を執拗に取り上げていた点では変わりがなかったのである。

「花嫁の部屋の幽霊」における殺人犯の精神状態は、「部分的な狂気」とされている「偏執狂」に類似しているといえる。ディケンズが描いた殺人犯は、知性や健康面ではきわめて正常であり、罪を犯したことが知れ渡るまでは、彼の金に対する異常なまでの執着や不道徳な考えに気付いたものは誰もいなかった。しかし、前述したように、ディケンズは「道徳的怠慢の結果」として殺人犯を描いたので

はない。殺人犯が裁かれたのは、ブリチャードらが指摘する分別の欠如による違法行為のためだが、その背後にある理由である貧しさゆえの劣等感、誰にも理解・同情されることがない。彼が成仏できない原因は、ここにあると考えられる。父親が金銭に無頓着なために家庭が貧しく、12歳の時にロンドンの靴墨工場で働かなければならなかったディケンズにとって、貧困から生じる劣等感は身近なものであり、この劣等感によっていかに人間の心が抑圧されるのかということ、ディケンズは十分に理解していた。したがって、ディケンズは、殺人犯の分別のなさや道徳心の弱さを非難するのではなく、人間の心に潜む感情が原因となる犯罪に興味を抱き、その異常心理をつぶさに追ったのである。この点で、「花嫁の部屋の幽霊」は、分別による自己抑制の領域を超えたものとして抑圧された感情の爆発を表現した、ロバート・ルイス・スティーヴンソンの『ジキル博士とハイド氏』(1886)に近いといえる。ディケンズがヴィクトリア朝後期の文学の先駆をなしていたことは、注目に値することである。

「花嫁の部屋の幽霊」は幽霊を登場させたゴシック風の作品だが、そこに表現されている不気味な空間は、18世紀に流行したゴシック小説の非現実的世界とは異なり、現実世界に見られる異常心理を示すための設定である。その異常心理とは、後見人の復讐心、富や権力への執着、虐待を加えられた花嫁の精神衰弱、両者に共通する追い詰められる者もつ恐怖心などである。ディケンズが異常心理として注目した狂気は、精神的な弱さを克服できない人間や激しい感情を抑制することに失敗した人間と結びつけられている。しかし、ディケンズは、この作品を通じて、モラルや自己抑制の美德を奨励しているというよりはむしろ、狂気とはどのようなものであるかを読者に知らせることを重視している。この点で、ディケンズの作品は、狂気の人間の行動を通じて理性とは何かを探究する精神医学と大いに関連があるといえる。狂気に関する精神医学者の学説は増大する一方だったが、これは正気と狂気の境界が曖昧になり、狂気とは何かを示すことで理性の存在を証明するほかに手段がなかったためである。ヴィクトリア朝中期の精神医学と同様に、ディケンズは、虐待や犯罪と狂気を関連づけて説明しようとした。「花嫁の部屋の幽霊」は、ディケンズが理性や分別の絶対性を訴えるために

狂気を利用して言説と深く関係していたことを示す作品として、重要であるといえる。

「二人の怠惰な奉公人の不精な旅」のテキストは、*Household Wards*, Vol.16 No. 395 (Saturday, October 17, 1857), No.396 (Saturday, October 24, 1857) を使用し、日本語訳は自身で行った。

- 1) Harry Stone, *The Night Side of Dickens: Cannibalism, Passion, Necessity*. (Columbus: Ohio State University Press, 1994), 310.
- 2) *Ibid.*, 345-58.
- 3) Elaine Showalter, *The Female Malady: Women, Madness and English Culture, 1830-1980*. (London: Virago Press, 1987), 24.
- 4) 例えば、ディケンズの小説『オリバー・ツイスト』(1837-39)のキルプや『ドンビー親子』(1846-48)のカーカーは、催眠術的な力を他者に及ぼすことができる人物である。ディケンズは催眠術を習い、妻をはじめとする人々に催眠術をかけていたという記述が残っている。また、コリンズの小説『ザ・トゥー・デスティニーズ』(1876)では、催眠術とテレパシーが使用されている。
- 5) Jenny Bourne Taylor, *In the Secret Theatre of Home: Wilkie Collins, Sensation Narrative, and Nineteenth-Century Psychology*. (London: Routledge, 1988), 19.
- 6) Philip Collins, *Dickens and Crime*. (London: Macmillan, 1964), 1.
- 7) Taylor, *ibid.*, 29.
- 8) Michael Slater, *Dickens and Women*. (London: Dent & Sons, 1983), 307.
- 9) Debora A. Thomas, *Dickens and the Short Story*. (London: Batsford Academic and Educational Ltd., 1982), 120.
- 10) Collins, *ibid.*, 2.
- 11) *Graham's Magazine* (May 1841) を参照のこと。
- 12) Heather Pike, 'Madness, Lunacy and Insanity' in *Oxford Reader's Companion to Dickens*, ed, Paul Schlicke. (Oxford: Oxford University Press, 2000), 370.
- 13) Thomas, *ibid.*, 113, 120.
- 14) ミシェル・フーコー著、田村俣訳『狂気の歴史—古典主義時代における』(東京・新潮社, 1975)の第3部を参照。
- 15) Pike, *ibid.*, 370-1.

- 16) Jenny Bourne Taylor and Sally Shuttleworth, eds, *Embodied Selves: An Anthology of Psychological Texts 1830-1890*. (Oxford: Clarendon Press, 1998), 29.
- 17) Ibid., 237. 'A Curious Dance round a Curious Tree' in *Household Words*, vol. 4 (January 17, 1852), 387-8 も参照のこと.
- 18) 'Things within Dr. Conolly's Remembrance' in *Household Words*, vol.16 (November 28, 1857), 518-23.
- 19) John Conolly, *An Inquiry Concerning the Indications of Insanity*. (London: John Taylor, 1830), 227.
- 20) Taylor and Shuttleworth, *ibid.*, 390.
- 21) John Barlow, *On Man's Power over Himself to prevent or control Insanity*. (London: William Pickering, 1843), 12-3.
- 22) Showalter, *ibid.*, 47-50. チャールズ・リードは、『ハウスホールド・ワーズ』に連載されたセンセーション・ノヴェルである『ハード・キャッシュュ』(1864)に、コノリー博士をモデルにしたウィッチャリー博士を登場させ、痛烈に風刺している。
- 23) Ibid., 33.
- 24) フーコー, 前掲書, 550.
- 25) James Cowles Prichard, *A Treatise on Insanity and Other Disorders affecting the Mind*. (London: Sherwood, Gilbert and Piper, 1835), 12.
- 26) Jean Étienne Esquirol, *Mental Maladies: A Treatise on Insanity* (1838) in Taylor and Shuttleworth, *ibid.*, 256-7.
- 27) Prichard, *ibid.*, 13.

2004年5月11日受稿

2004年10月28日レフェリーの審査をへて掲載決定

(一橋大学大学院博士課程)